

HIRAOKA Kindergarten Presents

季刊

湘南自然誌

Vol.41

July 13th 2026

 神奈川・湘南
 地域の自然を
 再発見する


cover story

湘南のアゲハ幼虫

 湘南に分布するアゲハチョウ亜科 10 種の
 終齢幼虫を中心に収録

 園児と自然に
 触れ合う中から生まれた
四季のタイム

 園児や地域の皆さんからの
 投稿写真を季節毎に掲載
**湘南発 みんなでつくる！
 生きものの図鑑**

 自然からのメッセージを子どもたちへ
平岡の自然教育の今

 県立愛川ふれあいの村
 吉田文雄学芸員によるコラム
心が育つ幼児教育

 遊んで学ぶ生きもののこと
知育ゲーム

四季のコラム（春）

本誌発行元の平岡幼稚園の園便りに掲載したコラムを一部改編してお届けします。

文／堀田佳之介（平岡幼稚園 園長）

自然豊かな園内

Topic 1

時に厄介な生きものも・・・



平岡幼稚園のビオトープでは、人の手で生きものを持ち込まずに環境を整えることによって生きものを呼び込んでいます。環境を多様にすればするほど、集まる生きものの種類や数が増えて子どもたちの自然体験の幅が大きく広がっていきますが、中には招かざる生きものもやって来てしまいます。

今年の春、平岡の森で初めてオオスズメバチの女王蜂を確認しました。体長 40 mm 超の巨大な体で大きな羽音をたてて飛ぶ様子は、威圧的な存在感があります。スズメバチ類の中でも最も危険と言われるオオスズメバチは、毎年、夏から秋にかけて全国各地で大きな被害がでていて、死者もでるほどです。敷地内で営巣されてしまうと園児にとって大変な脅威となってしまうので私が駆除しました。それだけでなく、今年はコガタスズメバチ、キイロスズ

メバチ、モンズズメバチの女王蜂も駆除しました。こんなに多くの種類が来るのは初めてのことです。

駆除したハチは、標本にして職員室に展示しています。特にオオスズメバチは流行りの最強図鑑的な書籍に掲載されていることもあり、知っている園児も多いのですが、野外では間近でじっくり見ることはできないので、多くの園児が興味を持って覗きにきます。

- 上) 恐る恐るスズメバチの標本を見る園児。怖いもの見たさからか意外と人気で、これ目当てに毎日職員室へ来る子もいるほど。
- 下) 左右の翅（はね）を広げると 8cm 近くもあるオオスズメバチの女王蜂。迫力の大きさだ。

平岡幼稚園の

Topic 2

旧園舎跡地から出土した壺



1



2

平岡幼稚園の旧園舎跡地（平塚市岡崎／現在の平岡の森付近）より出土した壺が、園創設者の自宅を片付けている際に発見されました。平塚市博物館の川端学芸員、新宮学芸員に見ていただいたところ、形や質感等の特徴から中世（15世紀～16世紀）に作られた「中世陶器 常滑窯（とこなめよう）」のものであろう、ということがわかりました。現在の愛知県常滑市あたりで作られ、船を使って200km以上離れた平塚市まで運ばれてきたようです。大きさは高さ約30センチ。中身が残っていないため、どのような用途で使用されていたのかは不明ですが、よくあるのは、お金を入れて埋める、経典を入れて埋める、だとか。壺の内側に錆が付いていないので、お金ではなく、経典などが入っていたのかもしれません。

壺は、焼き締め（釉薬は不使用）で、左右で多少のゆがみがあり、

手作り感が伝わってくる逸品です。壺の上部側面には、焼く前に付けられたという傷のような印（窯印）があり、作者や所有者等を表していると思われます。ちなみに作られた時期を人物年表で見ると、地元岡崎で有名な岡崎四郎義実よりも後、江戸城を築いた太田道灌（伊勢原市の道灌祭りでも有名）が活躍していたあたりの時代の可能性が高いそうです。地域の歴史が垣間見えるこの壺。機を見て園内に飾りたいと思っています。

- 1／旧園舎跡地から出土したおよそ600年前の壺（高さ約27cm、幅約25cm）。
2／園児にお披露目した時の様子。土の中に埋まっていた古い壺ということが、子どもたちの興味を惹いたようだ。

▶▶ Publisher of this magazine

本誌出版元 平岡幼稚園

平岡幼稚園では、宅地や耕作地に囲まれる園地をビオトープとして管理し、子どもたちは日々たくさんの「いのち」とふれあう園生活を送っています。本誌では、自然体験を重視する本園の幼児教育を紹介しつつ、読者の皆さんの自然環境と生きものへの理解を深める一助になるような記事を掲載しています。



アゲハのライフステージ

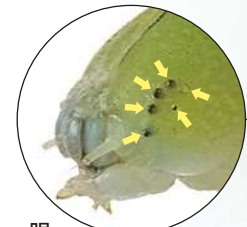


幼虫のからだ



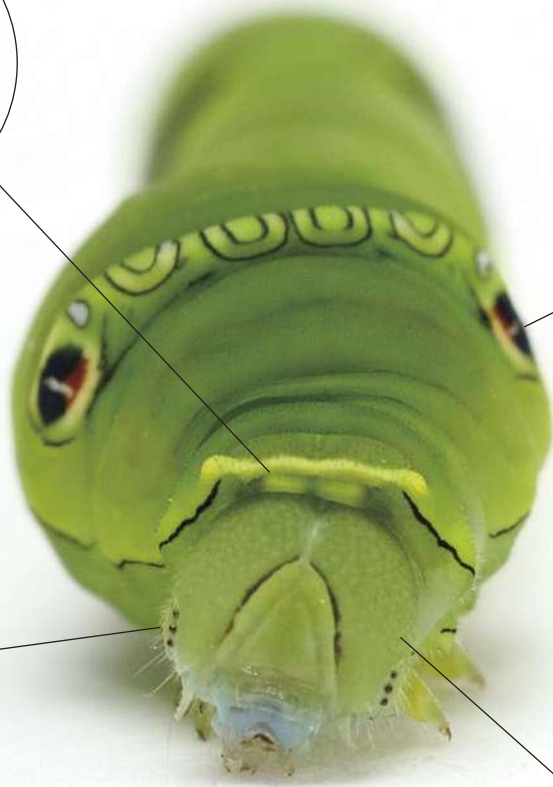
臭角

アゲハチョウ科特有の防御器官。2 股の角と匂いを出す。
(写真: photoAC)



眼

左右に 6 個ずつ、合わせて 12 個ある。



アゲハ

Papilio xuthus

頭部

本当の頭はここ。実はとっても小顔だ。

眼状紋

眼のように見えるが、これは単なる模様で、鳥などの捕食者から身を守る擬態と思われる。



3 対の胸脚

胸部

協力してくれた人



チョウ類研究家
深澤美佳 さん

1966 年鎌倉市出身。平塚市在住。約 30 年にもわたり、学会等に所属せず在野でチョウ類の研究を続ける。国産アゲハチョウ属の幼生期の研究では群を抜いており、著書『日本産アゲハチョウ属 *Papilio* 幼生期のすべて』(昆虫文献六本脚 / 2024 年出版)は、チョウ類研究者必携の書となっている。

成虫とは似ても似つかない姿をしていて得体的に知れない幼虫だが、少しでも見分けられるようになるのと親近感がグッと増してくるはずだ。深澤美佳氏が提供してくださった写真と知見をもとに、アゲハチョウ亜科 10 種について、見分けのしやすい終齢幼虫に要点を絞って紹介したい。

(次ページへ)

幼虫の見分け方を知ってみよう

アゲハチョウ科の幼虫は「臭角」と呼ばれる防御器官を持つのも特徴的で、危険を感じると角状の器官を突き出す。名前の通り独特の匂いを放つが、種類によって色や匂いが異なるというから面白い。ちなみに、昆虫なので脚は 6 本のように思われるが、幼虫期には胸部の 3 対 6 本の脚に加えて、腹部にも腹脚・尾脚と呼ばれる脚状の器官が 5 対 10 本ある。そのため、幼虫の脚は合計 8 対 16 本となる。

きや、蛹の時点で半減し、成虫になると 0.6 g くらいになってしまふ。体を変えざるに多大なエネルギーを消費し、空を飛ぶため軽量化するのだ。幼虫の生活は常に危険と隣り合わせだ。アゲハチョウ属の多くは 4 齢までは鳥の糞に擬態し、終齢幼虫になると葉に溶け込むような緑色に変わって身を守る。一見眼のように見える黒い紋様(眼状紋)も擬態と思われ、そのため胸部が大きな頭のように見えるが、実際の頭はその先端にあり、そこに本当の眼がなんと 12 個もある。



蛹



成虫

収録した アゲハ類

アゲハチヨウ亜科 Papilioninae

アゲハチヨウ属 Papilio

- アゲハ
- キアゲハ
- クロアゲハ
- モンキアゲハ
- ナガサキアゲハ
- オナガアゲハ
- カラスアゲハ
- ミヤマカラスアゲハ

ジャコウアゲハ属 Byasa

- ジャコウアゲハ

アオスジアゲハ属 Graphium

- アオスジアゲハ

特集

湘南のアゲハ幼虫

湘南に分布するアゲハチヨウ亜科 10 種の
終齢幼虫を中心に収録



気門

昆虫は肺を持たず、気門
から空気を取り込む。



4 対の腹脚



腹部



尾脚

はじめに

アゲハ類の 幼虫の世界を 覗いてみよう。

湘南地域に分布するアゲハチヨウの仲間 10 種の終齢幼虫を中心に、その見分け方や飼育法をチョウ類研究家の深澤美佳氏の助力を得てまとめた。

花から花へとひらひら舞うチョウは色彩豊かな種類が多く、昆虫の中でもっとも好まれていると言っても過言ではない。一方その幼虫は、イモムシ・アオムシ・ケムシなどと呼ばれ、敬遠する人が多い。しかし見ようによっては、ふっくらしたシルエットも相まってどこか愛らしさを感じないだろうか？ 今回、チョウの幼虫に魅せられて 30 年近く研究を続けてこられた深澤美佳氏の力を借りて、アゲハ類の幼生期にスポットを当ててみた。身近に見られる種も多いので、ぜひ幼虫にも目を向けてみて欲しい。

アゲハチヨウとは

アゲハチヨウの仲間といえば、一般的にはアゲハチヨウ亜科 Papilioninae を指し、日本には 15 種が分布する。湘南地域ではこのうち 10 種が見られる（右上の表参照）。卵↓幼虫↓蛹↓成虫の 4 段階を経る「完全変態」タイプの昆虫で、ステージごとに姿も生活スタイルもまるで別の生きもののようになる。卵から成虫になるまで約 1 ヶ月か（越冬個体を除く）、蛹の期間は 10 日ほど。その間に内部で体を再構築し、やがて羽化して大空へ飛び立っていく。

幼虫の特徴と不思議

幼虫は脱皮を繰り返しながら成長し、終齢時には重さ 3g ほどになる。その後さらに重くなると思い



アゲハチョウ属 *Papilio*

アゲハ

Papilio xuthus

「ナミアゲハ（並アゲハ）」とも呼ばれるように、アゲハチョウ属の中で最も普通で、湘南地域では丘陵地から平地まで広く分布する。「アゲハチョウ」と呼ばれることも。幼虫はミカン科なら広く食し、成長が早くて飼育もしやすい。成虫はキアゲハに似るが、前翅（まえばね）の付け根に縞状の模様があることで見分けられる。

【幼虫の特徴】

- 幼虫の体長** ▶ 38 ～ 50 mm（終齢幼虫）
- 食樹・食草** ▶ ミカン（果樹）・サンショウ・カラスザンショウ・カラタチ・ヘンルーダなど、ミカン科の植物なら広く食す。
- 見分け方** ▶ 腹足のすぐ上に白い大きな紋が並ぶのが最大の特徴。頭や脚は淡緑色。臭角はオレンジ色。
- 飼いやすさ** ▶ おとなしくて丈夫。成長が早く、他の幼虫との共存性も高いので飼いやすい。



成虫
（夏型メス）



アゲハチョウ属 *Papilio*

キアゲハ

Papilio machaon

日本産アゲハチョウ属では唯一セリ科の植物を食草とする。幼虫は、独特の縞模様をしているので他種との見分けは容易。湘南地域では丘陵地から平地まで広く見られる。パセリ、ミツバなどのプランター栽培でも飛来・産卵が期待できる。成虫はアゲハに似るが、前翅（まえばね）の付け根が黒色となることで見分けられる。

【幼虫の特徴】

- 幼虫の体長** ▶ 50 ～ 58 mm（終齢幼虫）
- 食樹・食草** ▶ セリ・パセリ・ニンジン・ミツバ・フェンネルなどのセリ科の植物
- 見分け方** ▶ 他のアゲハ類には見られない黒と黄色の縞模様で一目瞭然。頭にも縞模様。臭角はオレンジ色。
- 飼いやすさ** ▶ 性質はマイペースで成長も早く飼いやすいが、やや病気になるやすい面も。食草は、野菜として売られている農薬が使われたものは不可。



成虫
（夏型メス）

※ 卵は時間の経過と共に色が変わる。ここでは産卵後少し時間が経ったものを載せた。また、アゲハチョウ亜科 Papilioninae の成虫は、季節や雌雄によって模様や色彩が異なる種がいるが、ここでは夏型のオスカメスいずれかを選定した。



アゲハチョウ属 *Papilio*

クロアゲハ

Papilio protenor

湘南に分布する黒色のアゲハ類の中では最もポピュラーな種で、湘南地域では丘陵地から市街地まで広く見られる。幼虫はミカン科なら広く食し、飼育もしやすい。成虫の翅（はね）は、オスは翅表を開くとほぼ黒一色であるが、メスは翅の表と裏で同じような模様をしている。

【幼虫の特徴】

- 幼虫の体長 ▶ 50 ～ 68 mm（終齢幼虫）
- 食樹・食草 ▶ ミカン（果樹）・サンショウ・カラスザンショウ・カラタチなど、ミカン科の植物なら広く食す。
- 見 分 け 方 ▶ モンキアゲハに似るが、背中で左右の帯が繋がる。地色は濃いめの緑色。頭は褐色。臭角は赤色系。
- 飼いやすさ ▶ 他の幼虫との共存性が高く、丈夫で飼いやすい。中齢以降なら硬い葉も問題なく食べる。



アゲハチョウ属 *Papilio*

モンキアゲハ

Papilio helenus

成虫は日本産アゲハ類の中では最大級の大きさを誇る。湘南地域では丘陵地から平地まで広く見られる。幼虫はミカン科であれば広く食し、飼育もしやすい。成虫は、後翅（うしろばね）の表・裏ともに明瞭な白斑があることが特徴。この白斑は飛翔していてもよく目立つ。

【幼虫の特徴】

- 幼虫の体長 ▶ 55 ～ 68 mm（終齢幼虫）
- 食樹・食草 ▶ ミカン（果樹）・サンショウ・カラスザンショウ・カラタチなど、ミカン科の植物なら広く食す。
- 見 分 け 方 ▶ クロアゲハに似るが、背中の帯は離れている。頭は淡褐色。地色は黄緑色。臭角は赤色系。
- 飼いやすさ ▶ 他の幼虫との共存性が高く飼いやすいが、硬い葉は好まない。





アゲハチョウ属 *Papilio*

ナガサキアゲハ

Papilio memnon

南方系種。戦前の分布は九州・四国以南であったが、その後北上し、2000年頃に神奈川県にまで達した。現在は、丘陵地から平地まで広く見られる。幼虫はミカン科の果樹を好む。成虫は日本産アゲハ類の中では最大級の大きさになり、尾状突起（後ろの翅にあるしっぽのような突起）がないことが特徴。

【幼虫の特徴】

幼虫の体長 ▶ 60～70 mm（終齢幼虫）

食樹・食草 ▶ ミカン科の果樹・カラタチ以外は食べない。

見分け方 ▶ 背中の中帯が白っぽいのが特徴。頭は淡緑色。臭角は赤味をおびたオレンジ色。

飼いやささ ▶ 他の幼虫との共存がやや苦手。高密度での飼育は避けた方が無難。硬い葉でも問題なく食べる。



成虫（メス）



卵



4 齢幼虫



蛹（背面・側面）



アゲハチョウ属 *Papilio*

オナガアゲハ

Papilio macilentus

湘南地域では自然豊かな丘陵地で見られるが局所的。幼虫はコクスギやカラスザンショウを好む。成虫は翅（はね）の形が細長く、その名の通り尾（尾状突起）も長い。ジャコウアゲハに似るが、体（胸部・腹部）は一様に黒っぽく、目立った模様はない。

【幼虫の特徴】

幼虫の体長 ▶ 45～60 mm（終齢幼虫）

食樹・食草 ▶ 薄暗く湿った場所にあるコクスギ・カラスザンショウなどを好む。ミカン科の果樹は野外ではほとんど利用されないが、飼育下では若葉をよく食べる。

見分け方 ▶ 左右の眼状紋を繋ぐ茶色の太い線が大きな特徴。地色は青緑色で細身。臭角はオレンジ色系（黄色味をおびることも）。

飼いやささ ▶ 他の幼虫との共存が苦手。高密度での飼育は避ける。やや病気になるやすいので高温多湿にも注意。



成虫
（夏型メス）

細長い体



卵



4 齢幼虫



蛹（背面・側面）



アゲハチョウ属 *Papilio*

カラスアゲハ

Papilio dehaanii

翅（はね）に青や緑の金属光沢がある美麗種（特に♂）。湘南地域では丘陵地を中心に分布。幼虫はコクスギやカラスザンショウなどを好み、通常は4齢で緑色になる。成虫はミヤマカラスアゲハに似るが、裏側から見た時、前翅（まえばね）の白っぽい帯は太さが不均一で、上部（先端）ほど広い。

【幼虫の特徴】

- 幼虫の体長** ▶ 50～62 mm（終齢幼虫）
- 食樹・食草** ▶ コクスギ・カラスザンショウ・サンショウなど。ミカン科の果樹は野外ではあまり利用されないが飼育下では若葉をよく食べる。
- 見分け方** ▶ ミヤマカラスアゲハに似るが、左右の眼状紋下の黄色の帯は繋がらない。頭は淡緑色。臭角はオレンジ色系（黄色味をおびることも）。
- 飼いやすさ** ▶ 性質は温和で飼いやすが、やや病気になるやすいので高温多湿には注意。



アゲハチョウ属 *Papilio*

ミヤマカラスアゲハ

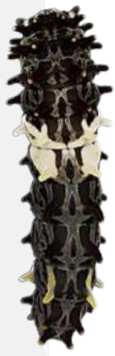
Papilio maackii

カラスアゲハ同様、翅（はね）に青や緑の金属光沢がある美麗種（特に♂）。湘南地域での分布は局所的。幼虫の食樹は、湘南地域では1960年頃に丘陵地に植栽されたキハダが主で、カラスザンショウも利用されている。地色は、通常は4齢で緑色になる。成虫はカラスアゲハに似るが、前翅（まえばね）の白っぽい帯は、上から下まで太さはほぼ均一になる。

【幼虫の特徴】

- 幼虫の体長** ▶ 50～58 mm（終齢幼虫）
- 食樹・食草** ▶ 主にカラスザンショウ・キハダで、ミカン科の果樹は食べない。
- 見分け方** ▶ カラスアゲハに似るが、腹脚に黒い線が入り、左右の眼状紋下の黄色の帯は背面で繋がる。頭は淡い緑色。臭角はオレンジ色系（黄色味をおびることも）。
- 飼いやすさ** ▶ 与えればコクスギも食べる。病気になるやすく、飼いやすいとはいえない。





ジャコウアゲハ属 *Byasa* ジャコウアゲハ

Byasa alcinous

食草は有毒であるウマノスズクサ科の植物。有毒成分を蓄積して身を守るといわれる。幼虫は多数の突起を持つが、毒刺毛ではなく、触れても危険はない。湘南地域での分布はやや局所的で、平塚市が 2019 ～ 2021 年に行なった自然環境評価調査では、環境の豊かさを示す「指標種」に選定された。成虫の翅（はね）は、オスは黒いがメスは白っぽい。オナガアゲハに似るが、胸部から腹部に赤色系の模様があるので見分けられる。

【幼虫の特徴】

- 幼虫の体長** ▶ 40 ～ 45mm（終齢幼虫）
- 食樹・食草** ▶ 湘南地域では、ウマノスズクサ、オオバウマノスズクサに限られる。
- 見 分 け 方** ▶ 多数の突起と白と黒の色合い。一目で本種と分かる。臭角はオレンジ色系。
- 飼いやすさ** ▶ 共食いの危険が高いため、高密度での飼育は避ける。



アオスジアゲハ属 *Graphium* アオスジアゲハ

Graphium sarpedon

鮮やかなブルーの翅（はね）が美しい南方系種。湘南地域では個体数は多く、丘陵地から平地まで幅広くみられる。幼虫は丈夫で飼いやすいが、食樹のクスノキ科の樹木は、総じて大木になるので、探す際は根元から生えるひこばえか、若い木が狙い目。成虫は、非常に俊敏に飛翔するため、捕獲の難易度は高めである。

【幼虫の特徴】

- 幼虫の体長** ▶ 40 ～ 50 mm（終齢幼虫）
- 食樹・食草** ▶ クスノキ・タブノキ・ヤブニッケイ・シロダモなど、クスノキ科の植物。
- 見 分 け 方** ▶ 眼状紋はごく小さい。左右の眼状紋を繋ぐ黄色い線も大きな特徴。頭は淡い緑色。臭角は黄色系。
- 飼いやすさ** ▶ おとなしくて共存性が高く、丈夫で飼いやすい。ただし、若齢時には柔らかい若葉が必須。



深澤美佳氏に簡単な飼育法を伺ってみた

幼虫を飼ってみよう。

幼虫は種類ごとに食べるものが決まっている。まずは幼虫を、下の表を参考にして食草・食樹のある場所へ探しに行こう。

幼虫の飼育に大がかりな準備は必要ない。次の三つがあれば十分だ。

① 飼育ケース

どのようなものでもよいが、多湿を避けるため通気をよくしよう。高温になる場所に置くのも避けたい。

② 食草・食樹

幼虫を採集した樹種の葉が最適だが、そうもない場合もあると思う。下の表を参考にして探してこよう。成長とともに葉の消費量が増えるので、餌が切れないように注意したい。ちなみに、ミカン科の果樹（ミカン・ユズ・レモンなど）の柔らかい若葉は、キアゲハ、ミヤマカラスアゲハを除くアゲハチヨウ属に対応可能だ。

③ 食草・食樹を挿す容器

幼虫が水に落ちないように、容器の口にアルミホイルや濡らして固めたティッシュをしっかりと詰め、隙間をふさいでおこう。

蛹になったら

越冬蛹でなければ蛹の期間は10日くらい。飼育途中で糸が切れて落ちてしまっても、そのまま下に転がしておけば羽化する。ただし、翅を伸ばす時にどこかに登る必要があるため、ケースの内側にティッシュやキッチンペーパーなどを貼って登れるようにしておこう。

卵から観察するなら

メスは羽化後すぐに交尾を完了していることが多いので、ケースに食樹を入れておくと産卵する。成虫は飼育下では自ら吸蜜しないことがほとんど。薄い砂糖水やカルピスウォーターなどをティッシュに浸み込ませて、そこに丸まった口を楊枝で伸ばして誘導すると吸ってくれる。メスは卵を100個以上産むので、飼える数を産んだら逃がしてあげよう。

飼育体験記

4月下旬、読者よりアゲハ幼虫を提供してもらい、編集部でも飼育にチャレンジしてみた。ユズの葉で見つけたそうだが、同じミカン科のキンカンを与えたところ、若い葉をモリモリ食べてくれた。成長が思ったよりずっと早く、あっという間に蛹になったのには驚いた。このくらいの期間なら、小さな子どもでも関心が途切れることなく観察が続けられるだろう。皆さんも幼虫と触れ合いながら、成長と共に大きく姿を変える様子を楽しんでほしい。

アゲハ幼虫の飼育例

蛹化直前までほぼ葉から離れないので、ケースの外でも飼育できる。ただし餌が切れると逃げることもあるので注意。



幼虫の食草・食樹 代表例

アゲハチヨウ属

アゲハ・クロアゲハ
モンキアゲハ・ナガサキアゲハ
オナガアゲハ・カラスアゲハ
ミヤマカラスアゲハ

キアゲハ

ジャコウアゲハ属
ジャコウアゲハ

アオスジアゲハ属
アオスジアゲハ

ミカン科

ミカン科の果樹・カラタチ・サンショウ・カラスザンショウ・コクサギなど

※種によって好みに偏りがある。詳細はP5-11参照。

セリ科

セリ・ミツバ・パセリなど

ウマノスズクサ科
ウマノスズクサなど

クスノキ科

クスノキ・タブノキなど



「食べるも食べられる」の絶妙なバランスが、多様な生きものが存在する豊かな生態系を支えているのである。

アゲハ類の幼虫は、アリやアシナガバチ、カマキリ、鳥などさまざまな生きものに捕食される。他にも、寄生性のハチやハエに寄生されて命を落とすこともある。メスが生涯で産む卵の数は、100個とも200個ともいわれるが、無事成虫になれるのはわずか1〜2%なのだ。残酷に思えるが、逆にみな生き残ってしまったら、幼虫自身たちまち餌が足りなくなり、種の存続の危機に陥ってしまうことになる。そうなれば、捕食者もまた命を繋いでいくことが難しくなってしまうだろう。

《食べる・食べられる》
《命の见えない繋がり》



《蛹へ姿を変えていく瞬間》

幼虫から蛹へ姿を一変させるその瞬間、何が起きているのだろうか？ 深澤さんがアオスジアゲハの蛹化の連続写真を送って下さったので紹介したい。枝などに糸を張って体を固定させ、服を脱ぐように幼虫の皮を脱ぎ捨てて蛹の姿に変わることがよく分かる。



アオスジアゲハの蛹化過程

もっと知りたい！ ゆず坊のこと

「ゆず坊（柚子坊）」とはアゲハチョウの仲間の終齢幼虫を指す俗称で、秋の季節語にもなっている。愛らしい存在として親しまれてきた「ゆず坊」にまつわる話題を少し紹介しよう。



《幼虫の護身術》

幼虫の擬態や臭角について写真付きで紹介しよう。



葉の色に溶け込む終齢幼虫

鳥の糞（上）にそっくりな中齢幼虫（下）

アゲハチョウ科の幼虫がもつ「臭角」も護身のための器官だ。危険を察知すると頭の上のあたりから警戒色（赤・橙・黄等）の角状突起を繰り出すと同時に、独特の匂いを発して捕食者を威嚇する。頭と胸を大きく振り上げるその姿は、まるで舌を出しながら頭部を振り上げるヘビのようだ。



モンキアゲハの臭角



終齢ではない5 齢幼虫

《あれれ？ おかしな幼虫》

餌不足や、餌の質が悪かったりすると、稀に4回脱皮しても終齢幼虫とはならず、5回目の脱皮をして、つまり6齢で終齢幼虫になることがある。上の写真はクロアゲハの5 齢幼虫で、4 齢と終齢の中間的な色彩をしている。

《もっと知りたい人へ》

この特集では、標準的な斑紋を持つ終齢幼虫を主に紹介してきたが、実は稀に斑紋のパターンが異なる個体が出現することが知られている。また、特徴がハッキリしないように見える1〜4 齢幼虫でも、細部をよく観察すれば種ごとに違いがある。幼虫の世界は奥が深いのだ。もっとアゲハ類の幼虫について知りたい方には、深澤美佳氏の著作『日本産アゲハチョウ属 Papilio 幼生期のすべて』をおすすめしたい。対象種はアゲハチョウ属に限られるが、氏の25年間にわたる研究活動から生まれた知見と、三千枚近くの写真が満載されている大著で、日本にこれ以上アゲハチョウ属の幼虫に詳しい書籍はないといってもよい。高価な本なので、まずは平塚市図書館などの公共施設で手に取ってみよう。

『日本産アゲハチョウ属 Papilio 幼生期のすべて』
深澤美佳著／昆虫文献六本脚
／12,000 円＋税



特集

湘南のアゲハ幼虫

湘南に分布するアゲハチョウ亜科 10 種の
終齢幼虫を中心に収録

END

おわりに

「湘南はアゲハの楽園」

特集に協力してくれた深澤さんによると、平塚市はアゲハチョウ属の楽園だという。

「私の現在住む平塚市もアゲハチョウ類は非常に多い。(中略) 田んぼや畑では丹沢の山々や富士山をバックにキアゲハが飛び交い、ちよつと山に入るとカラスアゲハやクロアゲハ、モンキアゲハなどが互いに絡み合いながら元氣いっぱい乱れ飛ぶ。山の麓ではヤブガラシの花でオナガアゲハが盛んに吸蜜し、市内にはミカン畑も多くあり、ナガサキアゲハの個体数も多い。また、局所的ではあるがミヤマカラスアゲハも生息しており、つまり、南方のカラスアゲハ類とシロオビアゲハを除くすべてのアゲハチョウ属がそろっていることになる。まさに Papilio の楽園である。」

深澤美佳著『日本産アゲハチョウ属 Papilio 幼生期のすべて』より抜粋

市内にはアゲハチョウ属以外のアゲハも豊富だ。平塚市の「市民の木」クスノキは、アオスジアゲハの幼虫の食樹で、そのせいかアオスジアゲハは市内で最もよく見かけるアゲハのひとつになっているし、場所によってはジャコウアゲハも盛んに飛び交う。平塚市をはじめ

めとする湘南地域は、総じてアゲハチョウの仲間との出会いに恵まれているのだ。

そのくらい私たちになじみの深い存在であるにもかかわらず、その幼虫のことをどれだけ知っているだろうか？ せっかくの「アゲハの楽園」。この好環境を活かしてもっと幼虫にも着目してみようだろうか。昨日まで葉っぱをむしゃむしゃ食べていた幼虫が、突如枝に糸を張ってじっとくまると。蛹という次のステージへ向かうため、ピクリとも動かずひたすら機が熟すのを待つ。体内で組織の大変革が始まるのだろう。その瞬間、幼虫は何を考えているのか？ などと擬人化しても答えは得られない。しかし、人間とは全く異なる不思議な生きものの在り方・生き方に触れ、常識が揺さぶられる経験は、私たちに心躍る新鮮な世界観・生命観をもたらしてくれるに違いない。

Special Thanks

本誌のために貴重な知見と多くの写真を惜しみなく提供してくださった深澤美佳さんに心より感謝申し上げたい。また、深澤さんとの縁を作ってくださった日本鱗翅学会元理事の牧林功さん、撮影用の幼虫を提供してくれた下田加奈子さん・梨々美さん・采芽さんにも御礼申し上げます。